

都城市文化財調査報告書第46集

くだま
久玉遺跡 第9・10次調査

久玉遺跡第9・10次調査報告書
（久玉地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査）

1999年3月31日

宮崎県都城市教育委員会

郡元地区遺跡群空中写真(西から)
昭和60年撮影

くだま 久玉遺跡 第9・10次調査

1999年3月31日

宮崎県都城市教育委員会

例　　言

1. 本書は、都市計画事業「祝吉・源元土地区画整理事業」に伴って実施した宮崎県都城市郡元町字久玉に所在する久玉遺跡の第9・10次の埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。

2. 発掘調査は、都城市教育委員会が主体となり、次の日程で実施した。

第9次調査 A地区：平成9年5月7日～平成9年7月1日

B地区：平成9年7月3日～平成9年9月8日

C地区：平成10年1月21日～平成10年2月25日

第10次調査 A地区：平成10年7月28日～平成9年11月4日

B地区：平成10年8月7日～平成10年8月12日

C地区：平成10年8月18日～平成10年8月20日

D地区：平成11年3月23日～平成11年3月29日

3. 調査の組織は、次のとおりである。

調査主体者 都城市教育委員会

教育長 限 元 幸 美

文化課長 遠 矢 昭 夫

文化課長補佐 綿 田 秋 嗣

文化財係長 中 村 久 司

調査 担当 文化課主事 横 山 哲 英（第9次調査担当）

文化課主事 桑 畑 光 博（第10次調査担当）

4. 本書の編集・執筆は横山と桑畑が行った。

5. 出土遺物の検討、特に陶磁器の分類・鑑定にあたっては、次の方々のご指導・ご協力を得た。

村上伸之（佐賀県西松浦郡有田町歴史民俗資料館学芸員）

大盛祐子（都城市文化課嘱託）

本文目次

1.はじめに.....	3
2.遺跡の位置と環境.....	4
3.調査の概要.....	7
1)第9次調査.....	7
2)第10次調査.....	16
4.まとめにかえて.....	27

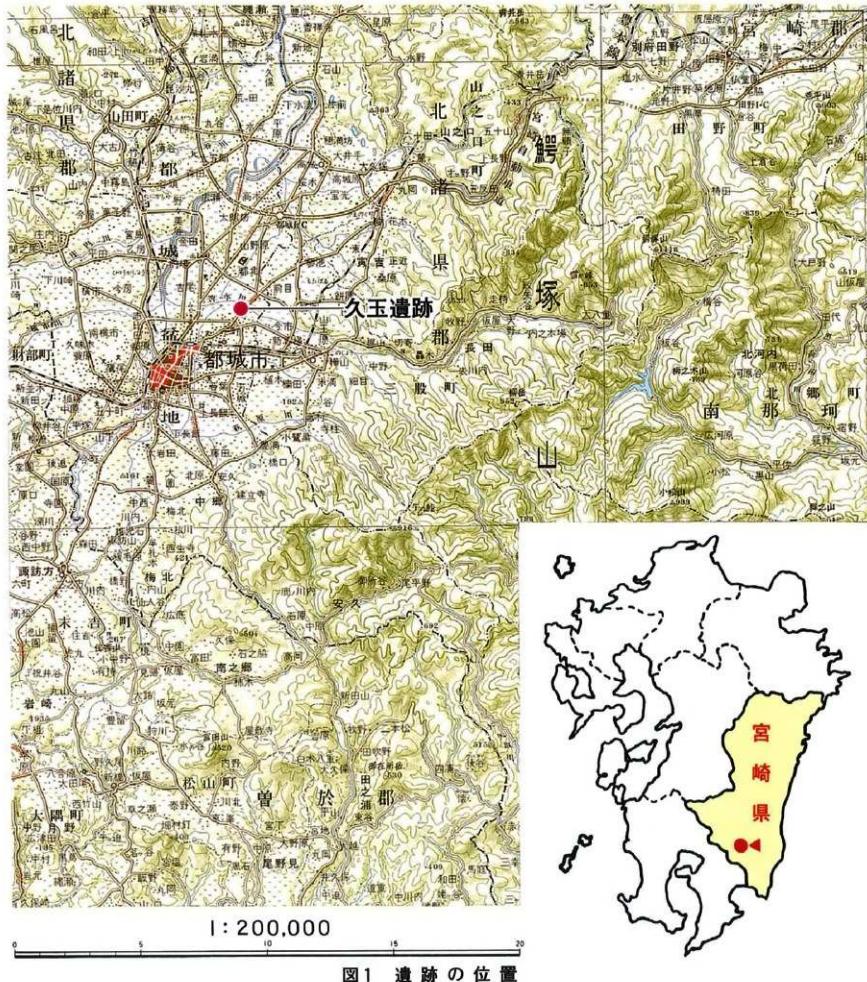
挿図目次

図1 遺跡の位置.....	3
図2 遺跡の環境.....	4
図3 調査した区域.....	5～6
図4 久玉9次A地区の遺構分布.....	8
図5 久玉9次A地区の中・近世溝と近世井戸跡.....	10
図6 久玉9次A地区 中世の掘立柱建物跡.....	11
図7 久玉9次B地区の中世溝.....	12
図8 久玉9次B地区の遺構分布.....	13
図9 久玉9次B地区の近世遺構（溝・井戸・土坑）.....	13
図10 久玉9次B地区の近世掘立柱建物跡.....	14
図11 久玉9次C地区の遺構分布.....	15
図12 久玉10次A地区の遺構分布.....	17～18
図13 久玉10次A地区の縄文土坑.....	19
図14 久玉10次A地区の中世溝.....	20
図15 久玉10次A地区 中世の掘立柱建物跡と土坑.....	21
図16 久玉10次A地区 近世の掘立柱建物跡と井戸跡.....	23
図17 久玉10次A地区の近世土坑と竪穴状遺構.....	24
図18 久玉10次B地区の中世溝と出土陶磁器.....	26
図19 久玉10次A地区的遺構変遷.....	28

1. はじめに

都城市街地の北東部に位置している祝吉・郡元地区では、昭和54年より土地区画整理事業が施工されています。平成10年度末の段階で全体の約92パーセントにあたる約89.98ヘクタールの施工が完了しており、平成14年度までに残りの約7.82ヘクタールの施工と換地処分までを実施する予定です。この事業に伴って、祝吉遺跡・松原遺跡・久玉遺跡という三カ所の遺跡の記録保存のための発掘調査が行われていますが、中でも久玉遺跡の調査は昭和63年度に第1次調査にとりかかって以来、広域にわたって継続して進められており、平成10年度で通算して第10次の調査をむかえます。

本書では、第9次調査と第10次調査の成果を写真と図面を使って紹介します。



2. 遺跡の位置と環境

宮崎県の南西部に位置する都城市は、都城盆地のほぼ中央部を占めています。この盆地は九州の東南部にあり、南北約25キロメートル、東西約15キロメートルの楕円状をなしています。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を瓶台山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、西南方のみがわずかに開かれた地勢を呈しています。また盆地中央部を大淀川が貫流しており、多くの支流を集め、南から北へと流れています。その大淀川を挟んで、東側の山地は比較的急峻であり、起伏が大きく、その裾部には緩やかに盆地底へと傾斜する広大な扇状地が発達しています。一方、北西に位置する山地は霧島火山の山麓にあたり、比較的緩やかなスロープとなっており、その周縁から南にかけてはおおむね平坦で起伏の少ないシラス台地が広がっています。

久玉遺跡は、都城市郡元町字久玉に所在し、大淀川の支流である沖水川によって、浸食された一万城扇状地の北縁部に位置しています。北側に展開する現水田地帯の低地面よりも約6mほど高い位置にあります。

同扇状地のいわば扇側部には、先述した区画整理事業に伴って発掘調査された祝吉遺跡・松原遺跡などがあります。祝吉遺跡では、弥生時代中・後期から古墳時代初頭にかけての堅穴住居跡群が見つかっており、松原地区第I遺跡では中世の方形館跡が検出され注目されました。

また、より西方の沖水川が大淀川と合流する扇端部では、古墳時代の地下式横穴墓が25基調査された牧ノ原地下式横穴墓墳群が所在します。

なお、扇状地の扇尖部にも多くの遺跡が見られます。特に、付近に扇状伏流水の湧水の堪えない池をかかる早水神社周辺は、重要な遺跡が集中しています。早水池のほとりにある沖水2号墳（県指定史跡）からは湖州鏡や経筒が発見されています。その北約350mの地点には島津氏初代の惟宗忠久の館跡と伝えられる祝吉御所跡（県指定史跡）があります。西側に目を転じると、市の公園整備事業に伴って、四次にわたって発掘調査を継続している池ノ友遺跡では、縄文時代や弥生時代の集落跡、中世の溝状造構などが見つかっており、さらに隣接する牟田ノ上遺跡でも弥生時代から古墳時代にかけての住居跡や中世の建物跡群などが確認されています。

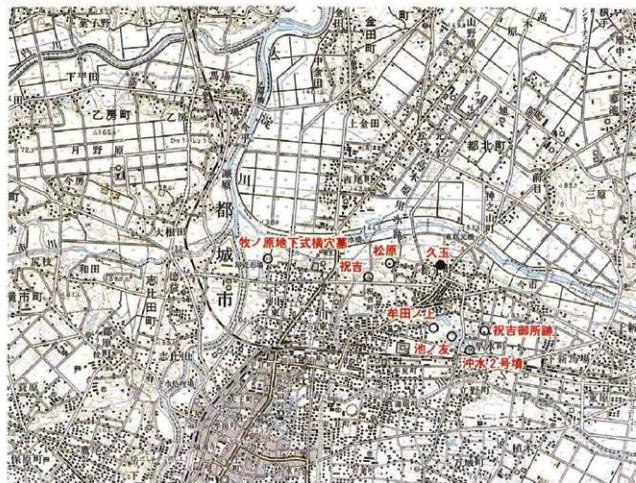


図2 遺跡の環境 (スケール 1/75000)

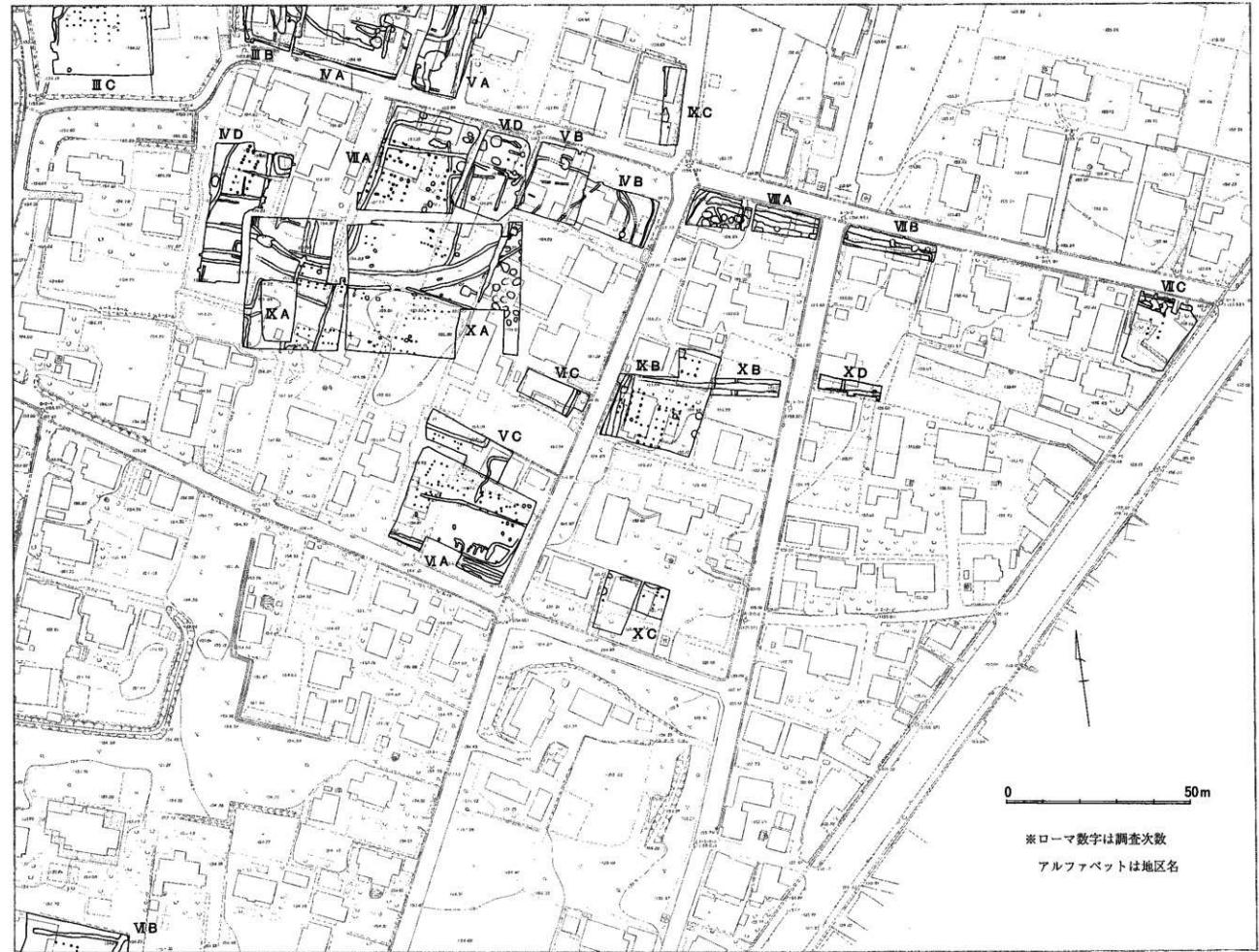


図3 調査した区域

3. 調査の概要

1) 第9次調査

第9次調査は児童公園予定地と市道建設予定地、及び換地に伴う住宅新築予定地について発掘調査を実施しました。調査区は調査順に、児童公園予定地をA地区、市道新設及び住宅新築予定地をB地区、市道拡幅予定地をC地区と呼称しています。また、今回調査を実施したA地区は第4次調査のD地区と第10次調査のA地区に、B地区は第6次調査のC地区と第10次調査のB地区に隣接した地点です。各区の調査面積は、A地区：747m²、B地区：573m²、C地区：110m²で、第9次調査の総調査面積は1,430m²です。調査の結果、いずれの地区でも中・近世を主とする時期の資料が多数出土し、過去に実施した周辺地区的成果を裏付けることができました。

なお、第9次調査の各区における基本的な土層層序は、第1層：灰色砂質土（現耕作土）、第2層：文明軽石をまばらに含む黒褐色砂質土、第3層：文明降下軽石層（桜島起源・15世紀後半）、第4層：黒色シルト土、第5層：御池軽石をわずかに含む黒色粘質シルト土、第6層：御池軽石をまばらに含む黒色粘質シルト土、第7層：御池軽石を多量に含む黒褐色粘質シルト土（第8層の漸移層）、第8層：御池降下軽石層（霧島御池火口起源・約4,200年前）、第9層：漆黒色粘質シルト土、第10層：明黄褐色粘質シルト土（第11層の漸移層）、第11層：アカホヤ火山灰層…と続きます。このうち遺構検出面となるのは第7層下部から第8層上面、遺物包含層は第2層（近世）及び第4～6層（中世）です。以下、各地区ごとに調査概要を紹介します。

〈A地区〉

児童公園予定地西半にあたるA地区では、東接している第10次調査A地区に比べ、中・近世の遺構がかなり高い密度で検出されています。

桜島起源の文明降下軽石層（15世紀後半）下位の黒色粘質シルト土及び文明軽石を含む黒色粘質シルト土を埋土とする中世段階の遺構群は、調査区のほぼ全域で確認されています。その内訳は、溝状遺構7条、掘立柱建物3棟とピット群、道路状遺構（硬化面）5条、土坑5基です。これらは文明軽石層の堆積位置や各々の切り合い関係などから、相対的に文明軽石降下前の2時期と降下後の1時期に分けることができます。さらに、文明軽石降下前の遺構に関しては、非常に少ない当該期遺物の中に15世紀中頃から16世紀代の舶載磁器（青磁線描蓮弁文碗や青花）・国産陶器（備前焼甕）等が散見され、これを溯源する時期の遺物が含まれていないことから、概ね文明軽石降下直前の15世紀中～後葉頃を想定しています。各遺構の詳細については表1にまとめて示しましたが、隣接地の調査で検出された遺構と関連性がある溝状遺構と掘立柱建物については、ここで簡単に触れておきたいと思います。

（以下に記す各調査次数・地区名は、図3の略号を用いています。）

まず、IX A区中央部で検出した弧



▲久玉第9次A地区空中写真（垂直上空から）

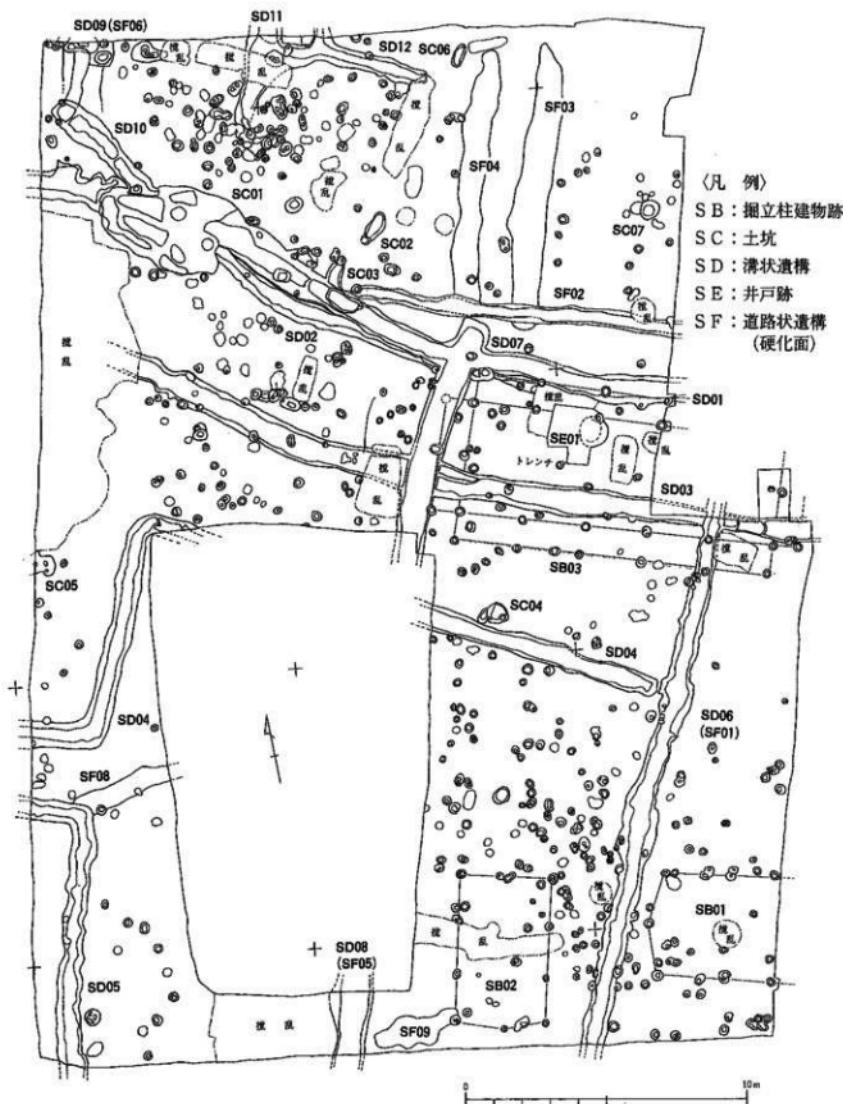


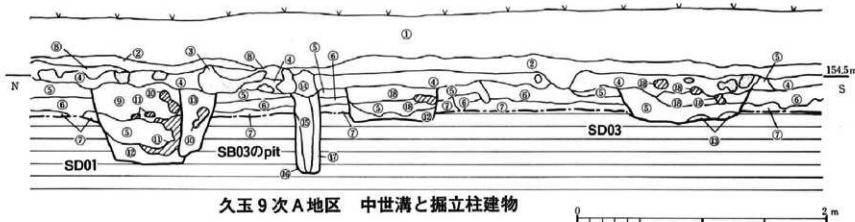
図4 久玉9次A地区の遺構分布

状に並走する二条の溝状遺構のうち、南側の S D03 に繋がる溝の北端は IV B 区まで追うことができ、さらに北走している可能性があります。この溝は IV B 区から V B 区を経て X A 区に至り、一旦途切れた後に西走して IX A 区の S D03、IV D 区の 2 号溝に連結していると思われます。一方、北側の S D01 と連結する溝も V B 区南側から X A・X A 区を経て IV D 区に至り、さらに西走して調査区外へと延びています。ただし、西側部分については、IX A・X A 区で確認した切り合い関係から、IX A 区西北部で一旦閉じる S D02・10 が当初設けられた溝で、その埋没後に S D01 がこれらを切って掘り直されたと想定しています。二条の溝とも西から東に向けて徐々に浅くなっているため、北東端部（IV B 区）付近では遺構の輪郭が不明瞭になっていますが、調査で確認できた範囲では、二条の溝が一定間隔を保ちながら弧状に並走している様子がうかがえることから、V B 区で消滅している S D01 に連結する溝も本来はさらに北走していたものと考えられます。この溝の明確な機能については、IX A 区においても両溝に挟まれた空間で硬化面等が検出されていないため、道路状遺構に伴う側溝の可能性を含め、詳細については不明です。しかし、これらを挟んで南北に分布する他の遺構を比較してみると、弧の外側（南側）には数棟の当該期掘立柱建物が分布しているのに対して、弧の内側（北側）では道路状遺構（硬化面）やピット群が散見される程度です。そうした遺構分布の差から、この溝の役割の一つとして、建物群の単位を区切る「境界」「区画」等の可能性を示唆することができるかもしれません。掘立柱建物については、調査区南部で検出した S B01（南北棟・2 棟×3 間）と S B02（東西棟・2 棟×3 間？）が、ほぼ直交する棟軸で切り合い関係もないことから、同時期であると考えられます。また、南北棟と東西棟が同じように「L」字形に配置された X A 区の S B 1・2 とも棟軸が類似していることから、これらも S B01・02 とはほぼ同じ時期の建物であると思われます。一方、調査区中央で S D01 を切っている S B03（東西棟・2 棟×5 間）は、久玉遺跡の中でもかなり特筆すべき建物です。柱穴規模はさほど大きくないものの、ほとんどの柱穴に礫石と同じ役割を果たすような、土を突き固めた版築上の痕跡が残っていました。また、S B03 は四面に庇が付くとみられ、この時期の掘立柱建物としては都城市内においても非常に稀な例です。なお、X A 区の S B 3 もこの S B03 とはほぼ同時期の建物であると思われます。

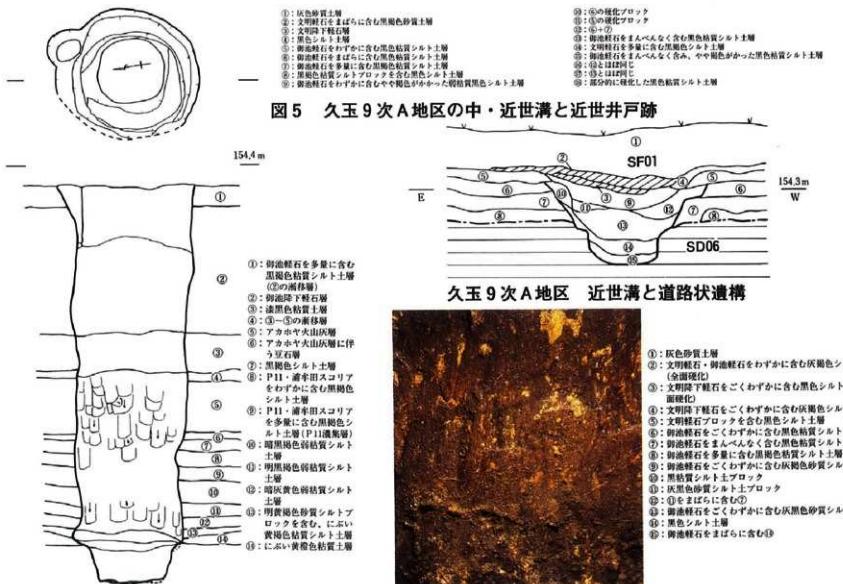
近世の遺構としては溝状遺構 5 条、道路状遺構（硬化面）4 条、土坑・井戸各 1 基とピット群が挙げられます。これらも中世段階と同様に調査区のほぼ全域で認められますが、掘立柱建物は検出されておらず、北側寄りに分布しているピット群もかなり粗なため、やや集落的雰囲気を欠いています。溝状遺構については、昭和 50 年代頃の土地境界線であった茶木等の植栽ラインと合致する区画的意味合いのもの（S D04～06）と、多量の陶磁器類が出土する廐棄溝的なもの（S D11・12）に分けられます。また、道路状遺構も S D06 の埋没後にその掘り形を利用した S F01 や、中世から継続して使用された S F03・04 などがあり、溝と同様に現代の植栽ラインと合致するものもあります。そうしたことから、近世段階に設定された土地の区画線が、「溝」⇒「道路（硬化面）」⇒「茶木等の植栽」と姿を変えながらも、現代まで永続的に用いられてきたと考えられます。この時期の遺構からは、概ね 3 段階（①17 世紀後半頃、②18 世紀中葉～末頃、③18 世紀末～19 世紀代）に大別される遺物が出土しています。貝目積痕・同心円タキなどから特徴的な薩摩焼の壺や、唐津系内野山窯の碗・皿に代表される①の時期の遺物はかなり少量ですが、②の時期に入ると肥前系陶磁器が多量に流通していたと推測され、久玉遺跡全体でみても当該期出土遺物の量は飛躍的に増加します。③の時期になると、こうした肥前系の製品は徐々に減少傾向をたどりますが、代わってそのシェアを占めるのが、壺などの大型器種に加え、ありとあらゆるバリエーションの生活雑器類が大量生産され始める薩摩焼です。こうした出土陶磁器の推移、とくに②から③への変化は、薩摩藩が殖産興業政策の一環として窯業技術の発達と藩産品（薩摩焼）の消費拡大を図るとともに、国産磁器先進地であった肥前地域から流入する藩外製品への排他的政策をとった結果であると推察しています。今後階層差による使用製品の产地・クリティカル・オリティーの違いを比較・検討していくとともに、③の時期に生産されていたといわれる薩摩系磁器について検証を進めることで、こうした近世後期の社会背景も明らかになっていくかもしれません。

遺構名	規 模(m)		断面 形態	理 土	切 合 關 係 等	特 故・(時 期)	
	幅	深 さ					
S D 0 1	0.8~1.3	0.45~0.7	U字形	5・6 箍	SD02を切り、SD07・SB03・SC01に切られる。 XA区のSD2・ND区の3号室と連結する。	上一下層まで縦化ブロックが認められる。(文明輕石下層)	
S D 0 2	0.8~1.0	0.3~0.5	U字形	6・7 箍	SD01・07・SC01に切られる。SD10と同溝。	床面付近に礎化ブロックが認められる。(文明輕石下層)	
S D 0 3	1.0~1.2	0.1~0.25	浅いU字形	5 箍	SD07に切られる。XA区のSD3と連結する。	上層・床面付近に礎化ブロックが認められる。 (文明輕石下層)	
S D 0 4	0.6~1.0	0.5	箱形	2 層		昭和65年時の土地境界線と一致する。(近世後半)	
S D 0 5	0.6~0.9	0.6	U字形	2 层	SP08を切る。	昭和65年時の土地境界線と一致する。(近世後半)	
S D 0 6	0.5~1.2	0.7	U字形	2 层	埋没は上層にSF01が形成される。	北西部は昭和65年時の土地境界線と一致する。(近世後半)	
S D 0 7	1.1~1.2	0.5	箱形	5・6 箍	SD01~03を切る。SD08と同一構の可能性あり。 埋没は上層にSF04が形成される。	上一下層まで縦化ブロックが認められる。 (文明輕石下層)	
S D 0 8	1.0~1.6	0.5	箱形	5・6 箍	SD07と同一構の可能性あり。	中面に埋めブロックが認められる。(文明輕石下層)	
S D 0 9	1.4	0.3	U字形	5・6 箍	SD10に切られる。	上一下層まで縦化ブロックが認められる。(文明輕石下層)	
S D 1 0	0.8~1.2	0.3	U字形	6・7 箍	SD09を切り、SC01に切られる。SD02と同溝。	(文明輕石下層)	
S D 1 1	0.8	0.2	U字形	2 层		18C中葉~18C末の肥能系器皿、鹿角焼が出土。(近世後半)	
S D 1 2	0.6	0.2	U字形	2 层		18C末~後業の肥能系器皿、18C後葉~19C代の鹿角焼が出土。 (近世後半)	
遺構名	規 模		柱穴理土	備	考	(時 期)	
S B 0 1	2×3 回ノ - 東側		6・7 箍	柱軸がSB02・XA区のSB1・2と同一。(文明輕石下層)			
S B 0 2	2×3 回ノ - 東北側		6・7 箍	柱軸がSB01・XA区のSB1・2と同一。(文明輕石下層)			
S B 0 3	2×3 回ノ - 西側		5・6 箍	四面に庇が出来る可能性あり。SD01・02を切り、SD06・07に切られる。柱軸がXA区のSB3と同一。(文明輕石下層)			

表1 久玉第9次A地区溝状遺構・掘立柱建物一覧



久玉 9次 A 地区 中世満と掘立柱建物



久玉9次A地区 近世の井戸跡(SE01)

▲S E01壁面に残る掘削具の痕跡

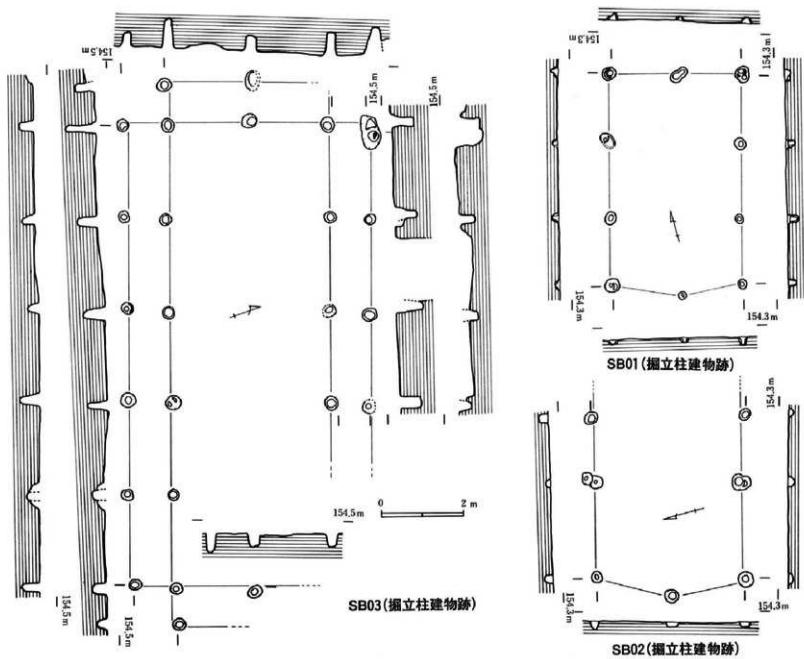


図6 久玉9次A地区 中世の掘立柱建物跡



▲久玉9次A地区 出土陶器(薩摩焼)



▲久玉9次A地区 出土土師器



▲久玉9次A地区 出土染付(肥前系磁器)

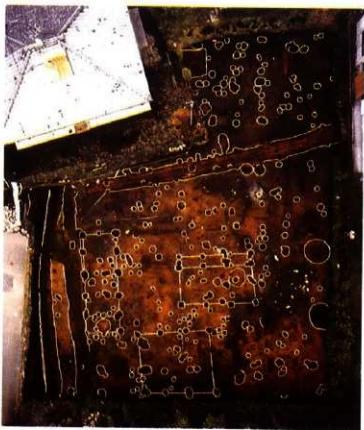


▲久玉9次A地区 SF01上面出土銅製仏像

〈B 地区〉

B地区で確認した文明軽石降下前後の時期の遺構は、溝状遺構4条（S D01・S D02-1・2-3）、土坑1基（S C08）及びピット群で、掘立柱建物は検出されていません。調査区北側を東西方向に走行するS D01は、東接しているX B区で出土しているS D4と連結する溝です。S D01においては、X B区で認められた溝の切り合いは確認されませんでしたが、文明軽石層直下に硬化面が残存していることから、埋没する過程で通路として使用された時期もあるようです。また、調査区西端を南北方向に走行するS D02は切り合い関係から3条（埋土に全く文明軽石を含まないS D02-1、埋土中一上層に文明軽石が堆積し、-2-1を切るS D02-2、文明軽石層を切って設けられたS D02-3）の溝に分けられます。これらはⅦB・C区及びⅧA区で検出された溝と連結してL字形に走行していると思われ、東・南部の調査結果次第では、方形に巡る溝になる可能性があります。なお、いずれの溝にも流水作用を示す砂層の堆積は認められませんでしたが、S D02-1・2において床面から埋土中位にかけて形成された硬化層を面的に把握することができたことから、これらは用排水路よりも区画や通路（溝底道）の役割を果たす溝であったと推測しています。

近世～近代の遺構は、溝状遺構1条、掘立柱建物5棟、土坑7基、井戸・カマド状遺構・石組遺構各1基、欄干1条、ピット群を確認しています。棟軸が類似し、ほぼ同時期と思われるS B01～03は、いずれも大型の柱穴から構成されており、床面には根石や版築状の硬化面などが残っていました。また、上部に礎石状の偏平礎が据えられた柱穴や切り合いの認められる柱穴があることから、建て替えや部分的な柱材の取換え等が行われていたと考えられます。なお、S C01やS E01も、出土遺物からこれらと同じ18世紀後半頃に比定される遺構です。S B03を切っているS D03からは、礎群とともに廃棄されたとみられる17世紀末～19世紀後半頃の陶磁器類が多量に出土しています。主となるのは19世紀代の遺物ですが、その組成からA地区と同様に肥前系→薩摩焼→瀬戸焼という使用陶磁器の推移を追うことができます。S D03と併存していたS S01は人頭大の河原石を升状に組んだもので、平面プランは凸字形を呈しています。用途については不明です。



久玉第9次B地区空中写真（垂直上空から）

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| ①灰白色砂質土層 | ④灰色砂質土層 |
| ②茶褐色砂質土と文明軽石の混土層 | ③御油軽石をわざかに含む根石色砂質シルト層 |
| ③文明陣下柱石層 | ⑤御油軽石をわざかに含む黒褐色砂質シルト層 |
| ④土面上に③を含む黑色粘質シルト層 | ⑥灰褐色シルトと文明軽石の泥土層 |
| ⑤土面上に③を含む黑色粘質シルト層 | ⑦御油軽石をわざかに含む黒褐色砂質シルト層 |
| ⑥御油軽石をわざかに含む黑色粘質シルト層 | ⑧御油軽石をわざかに含む黒褐色粘質シルト層 |
| ⑦御油軽石をごくわずかに含む黑色粘質シルト層(硬化) | ⑨明治時代をさばらに含む |
| ⑧御油軽石をわざかに含む黒褐色粘質シルト層(硬化) | ⑩御油軽石をしまへんな(含む) |



〈凡例〉

SK：カマド状遺構

S L : 欄列

S S : 石組遺構

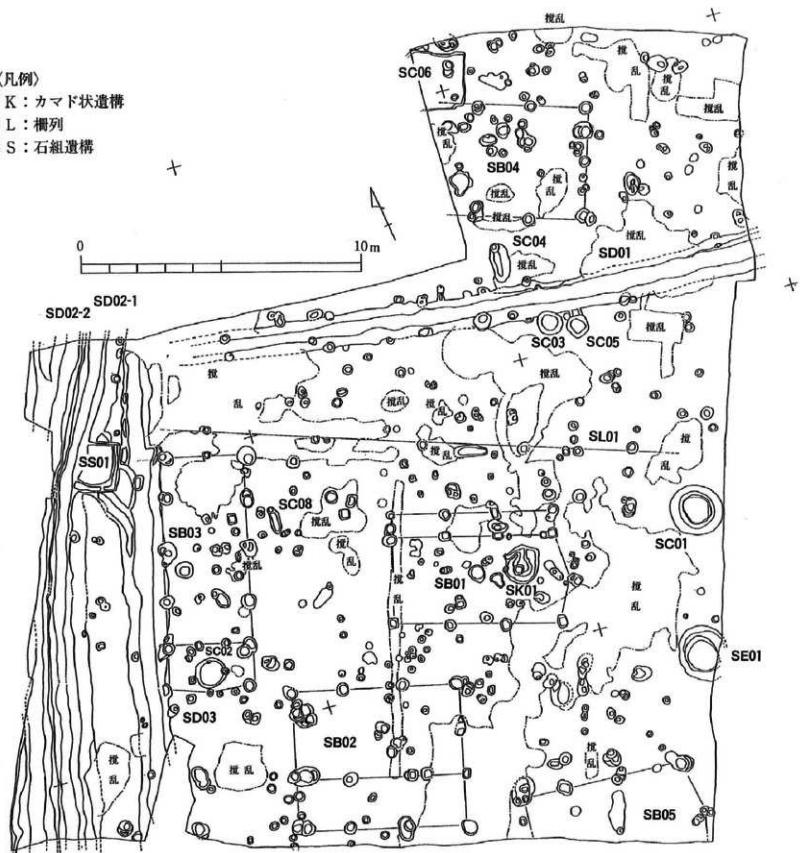


図8 久玉9次B地区の遺構分布



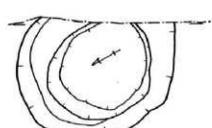
久玉9次B地区
近代?のカマド状遺構(SK01)



泥炭土は、炭化粒・御池軽石を含む明灰白色砂質土(灰状堆積物)が中一下層にみとめられ



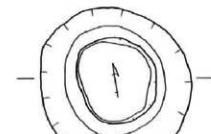
▲近代？のカマド状遺構(SK01)半裁状況(北から)



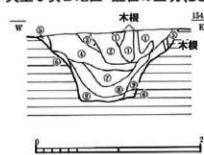
久玉9次B地区



①**色彩色鉛筆**
色彩色鉛筆を多種に含む潤滑色鉛筆シート履
用
②**深緑色色鉛筆シート履**
③**黒灰色色鉛筆シート履**
④**赤鉛筆色色鉛筆シート履**
⑤**油絵鉛筆石を多種に含む④**
⑥**油絵鉛筆石を多種に含む④**
⑦**油絵鉛筆を多種に含む④**
⑧**油絵鉛筆をまんべんなく含む潤滑色鉛筆質シート履**
用
⑨**油絵鉛筆シートブロッカをまんべんなく含む潤滑色鉛筆**
用
⑩**油絵鉛筆シートブロッカをまんべんなく含む潤滑色鉛筆**
用
⑪**油絵鉛筆ロックワックスをかわせに含む⑩**
⑫**油絵鉛筆ロックワックスをかわせに含む⑩**
⑬**色彩色鉛筆シートブロッカを含む⑪**
⑭**色彩色鉛筆シートブロッカを含む⑪**
⑮**色彩色鉛筆シートブロッカを含む⑪**



久玉9次B地区 近世の土坑(SG01)



久玉9次B地区
近世溝(SD03)断面図

- ①湖池鈣石大粒を多量に含む黒泥色粘質シルト層
 - ②湖池鈣石大粒を含むべんなく含む黒泥色粘質シルト層
 - ③湖池鈣石細粒を含むべんなく含む黒泥色粘質シルト層
 - ④湖池鈣石細粒を多量に含む黒泥色粘質シルト層
 - ⑤湖池鈣石細粒を多量に含む黒泥色粘質シルト層
 - ⑥明黒色粘質シルトを含む湖池鈣石ブロック
 - ⑦湖池鈣石粗粒を主に含む黒泥色粘質シルト層
 - ⑧湖池鈣石細粒を主に含む黒泥色粘質シルト層

図8 夕王8次B地区の近世遺構(溝・井戸・土塁)



◆石組遺構
(SS01)
完掘状況
(東から)



◀近世溝(SD03)
内にみとめられる
石組(南から)



◆久玉9次B地区
出土陶器
(薩摩焼)



◆久玉9次B地区
出土染付(肥前系)



右から
肩部内面の
タタキ痕、
肩部外面の
搔き落とし、
底部外面の
貝目積重



◆久玉9次B地区出土染付(左端は瀬戸系)

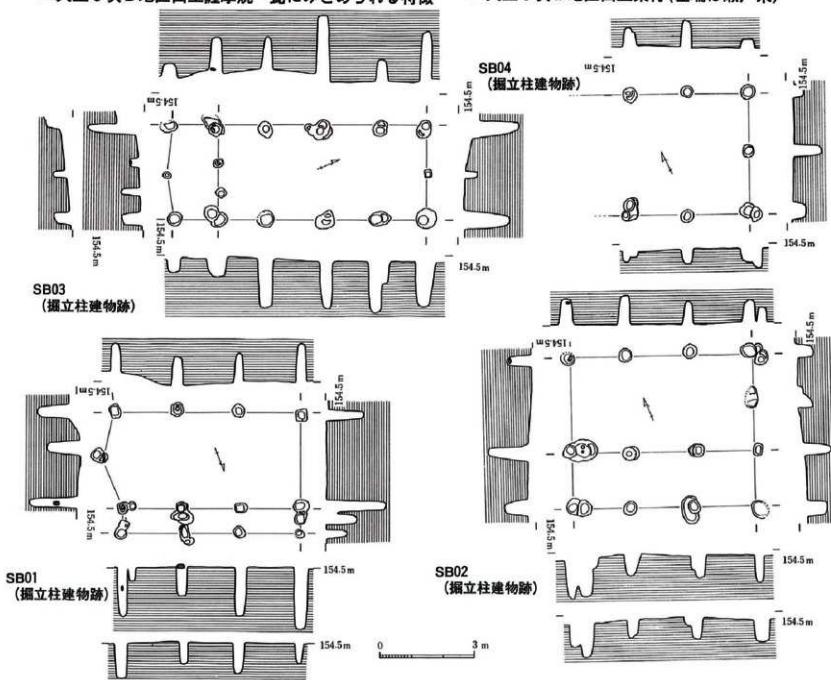
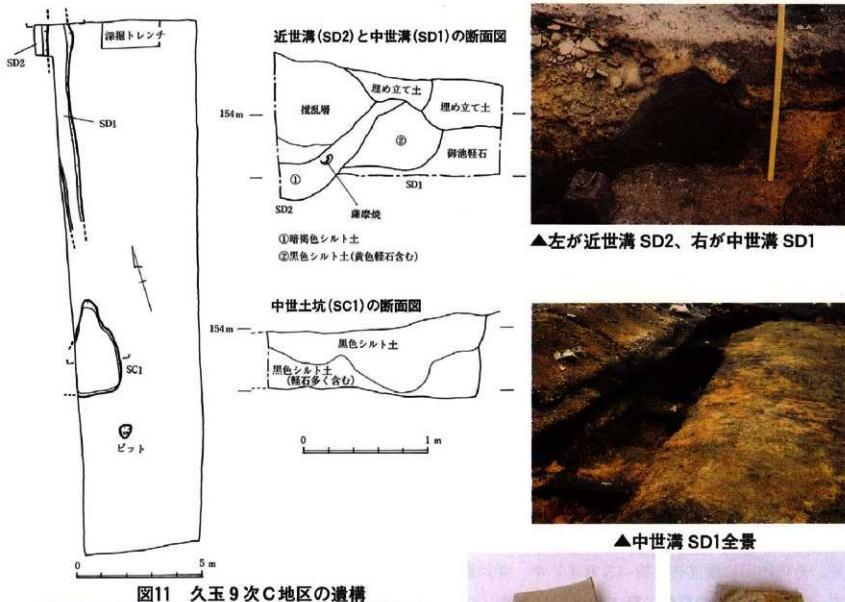


図10 久玉9次B地区の近世掘立柱建物跡

(C地区)

この調査区は北方約25mの地点に第8次調査のB地区があり、その調査区から南へ延びる溝状遺構の存在が予想されていました。

調査の結果、遺跡の地層は霧島御池軽石層上面まで削平され、遺物含層は認められませんでしたが、その同軽石まで掘り下げるに、調査区域北部で、黒色シルト土を埋土とするSD1とその西半分を切るSD2の一部が検出されました。SD1の遺構内堆積土上部からは青磁が出土しているのに対し、SD2からは薩摩焼のすり鉢などが出土しています。前者が中世で、後者が近世と思われます。調査区域の中央の西よりに不整形の土坑SC1があります。覆土はSD1と同一であるため、同一時期と考えられ、本来は溝状遺構に接続していた可能性がありますが、SD1の南端が現代の搅乱により破壊を受けているため確認することはできませんでした。なお、SC1からは親指大の円碟が数点出土していますが、その性格等は不明です。



2) 第10次調査

第10次調査は児童公園予定地と道路建設予定地について発掘調査を実施しました。なお、便宜上、児童公園予定地をA地区とし、道路部分3箇所については調査の順番で、それぞれB・C・D地区としました。調査面積は、A地区が1,595m²、B地区は95m²、C地区は220.5m²、D地区は68m²です。全体で1978.5m²です。なお、A地区とB地区は、それぞれ第9次調査のA地区とB地区に隣接した調査区で、調査着手前の段階ですでに検出されていた中世・近世の遺構とのつながりが予想されていました。以下、A・B・C地区について紹介します（D地区は調査中）。

〈A地区〉

調査区域の東側において、平面プランが円形や梢円形や不整形などの土坑群が25基検出されました。SC9の土層断面を見ると、土坑の掘り込み面は中世の遺物包含層（黒色粘質シルト土）よりも下位で、今から約4200年前に堆積した霧島御池軽石層を掘り込んでいます。遺構内にはおおむね黄色軽石を多く含み固く締まった黒褐色シルト土が堆積しています。深さはいずれも1.3m程度ですが、これらの土坑群からは、まったく遺物が出土していません。したがって、遺構の明確な時期・機能は不明ですが、SC9の遺構内堆積土下部の土壤を炭素年代測定した結果、今から約3980年前という数値が得られていますから、縄文時代中期から後期頃には埋まってしまったと思われます。また、SC24を断ち割ってその断面観察をしていますが、遺構下半部は、霧島御池軽石の崩落によると思われる軽石層のレンズ状堆積と黒色土の互層になっています。ちなみに床面にピットの痕跡は認められませんでした。

調査区のほぼ全域で、桜島文明軽石（15世紀後半）下の黒色粘質シルト土を埋土とする中世の遺構群が見つかっています。その内訳は、溝状遺構5条、土坑15基、ピット群と掘立柱建物6棟分です。中でも注目されるのは、調査区の中央部を東西に横断するように、弧状に走行する二条の溝状遺構です（SD2とSD3）。両者は3~4m幅の無遺構地帯を挟んでほぼ平行しており、溝幅は0.6m~1m程度で、深さは10~60cmです。SD3は調査区中央で一端途切れ、約8mの間隔をあけて、西へと続きます。調査区西端の土層断面を見ると、両溝状遺構の最上部に桜島文明軽石が部分的に堆積しているので、15世紀後半には完全に埋設していたものと思われます。二つの溝に挟まれた部分の土層断面中に硬化層は残っていましたが、両溝は道路遺構の両脇に設けられた側溝の可能性があります。ちなみにSD3の埋土中から鉄製の鎌が1点出土しています。なお、南北に走行するSD14はSD2に切られており、より古い段階のものです。SD3の南側にある掘立柱建物のSB1（東西棟・1間×3間）とSB2（南北棟・2間×3間）は棟軸が直交し、「L」字形に配置され、両者の重なりが認められないで、同時期のセットになる建物と考えられます。また、SB3は東西棟の1間×3間で、3つのピット（柱穴）から根石と思われる砂岩礫が検出されており、ピットの重なり具合からも建て替えが行われたことがうかがえます。

中世の遺構群とは異なり近世～近代の遺構群は、調査区域の北側のみで見つかっています。

4条の溝状遺構（SD1・SD13・SD15・SD17）によって「コ」の字形の空間が作り出されており、その内部に掘立柱建物（SB7）や、井戸跡（SC32）、そして、竪穴状遺構（SC31）が存在します。なお、SD1の東側に竪穴状遺構が2基（SC2・SC1）検出されていますが、SC2はSD1に切られています。なお、SD1は土層断面を観察した結果、数次にわたり掘り直された可能性があります。そのことを裏付けるかのように出土した陶磁器類の年代は17世紀から19世紀後半までと幅広く、主体は18世紀前半から19世紀前半のものが占めています。建物跡・SB7は南側が破壊されているため全体のプランを把握することができませんでした。いくつかのピット（柱穴）上部に根石と見られる砂岩礫があり、建て替えが行われたことを示すものと思われます。竪穴状遺構・SC31の内部には、こぶしだから人頭大の礫群が粘土と炭化物を含む土とともに大量に投げ込まれており（おそらく竪穴の北側コーナーから

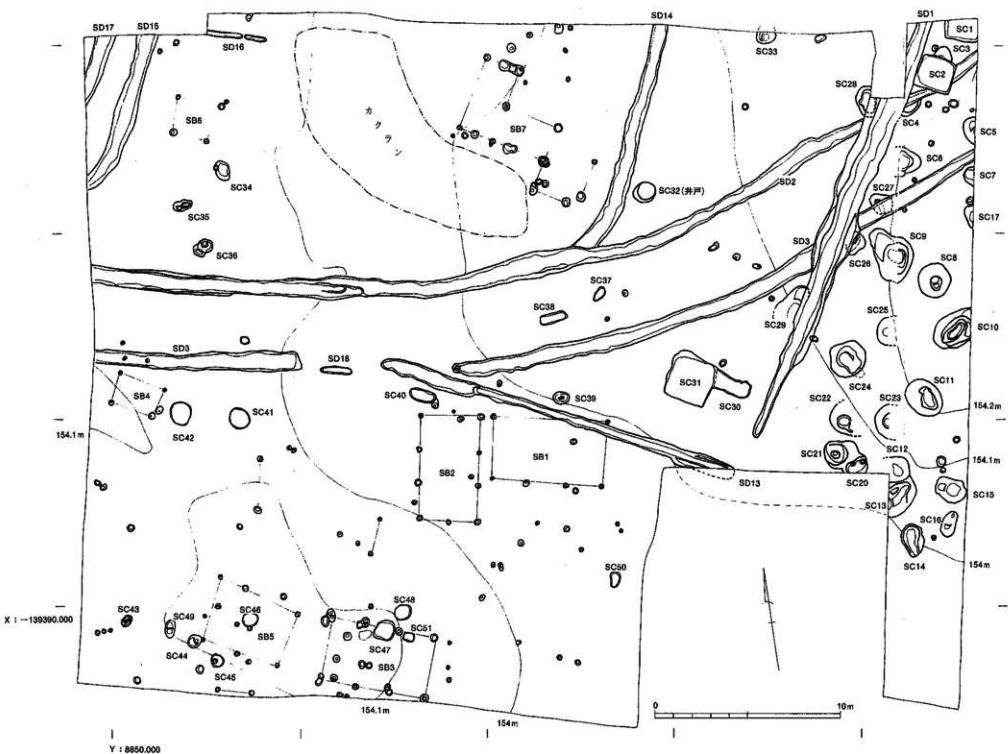


図12 久玉10次A地区の造構分布

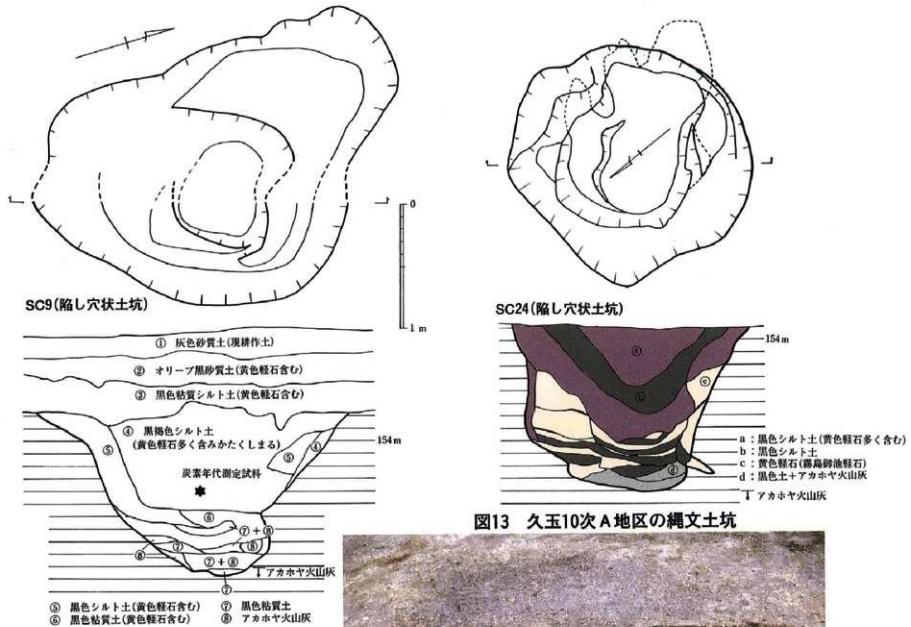


図13 久玉10次A地区の縄文土坑



▲ 久玉10次A地区東側土坑群調査風景
 手前の方形タイプは近世土坑(SC2)





▲並行する中世の溝SD2とSD3(西から)



▲中世の溝SD14とSD2の切り合い状況(南から)



▲SD2とSD3の土層断面(調査区西壁)



▲SD3内鉄鎌出土状況

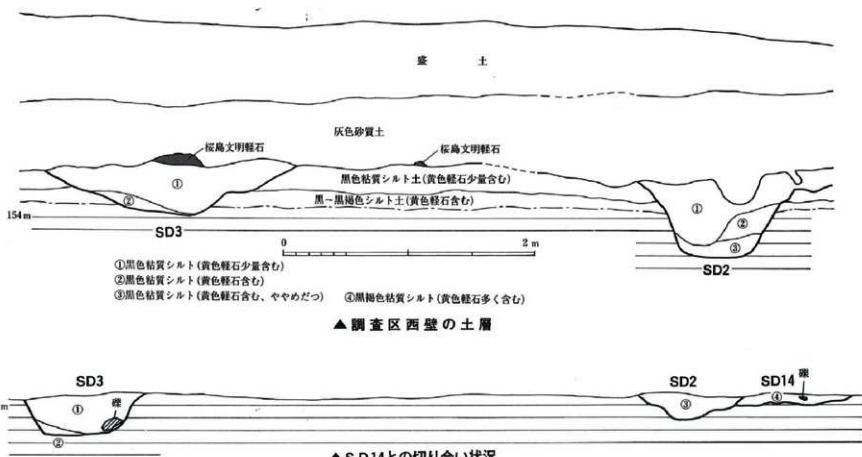


図14 久玉10次A地区の中世溝

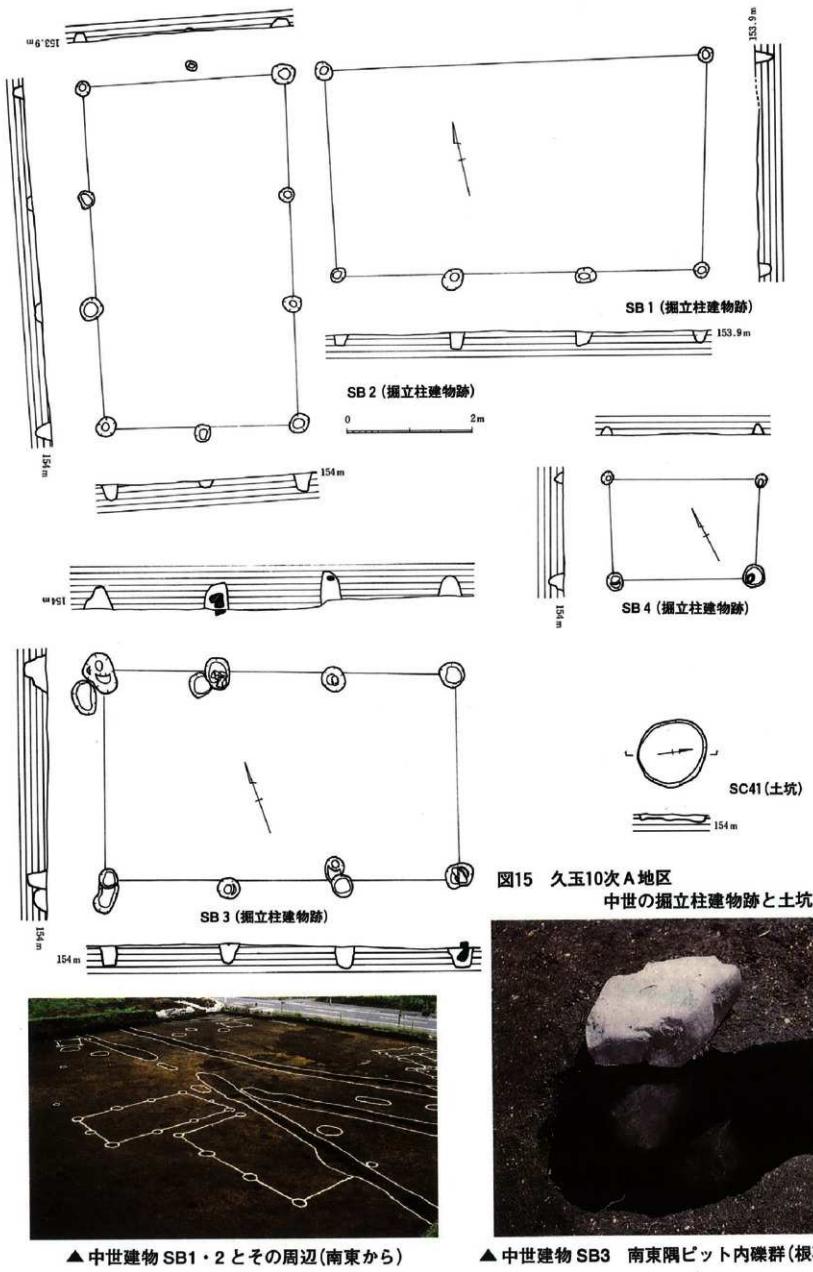


図15 久玉10次A地区
中世の掘立柱建物跡と土坑



▲久玉10次A地区 近世溝SD1(南から)



▲近世溝SD13(西から)



▲近世溝SD15とSD17(南から)



▲SD1出土染付



▲SD1出土陶器



▲SD1出土陶器



▲SD1出土陶器



▲SD15出土染付

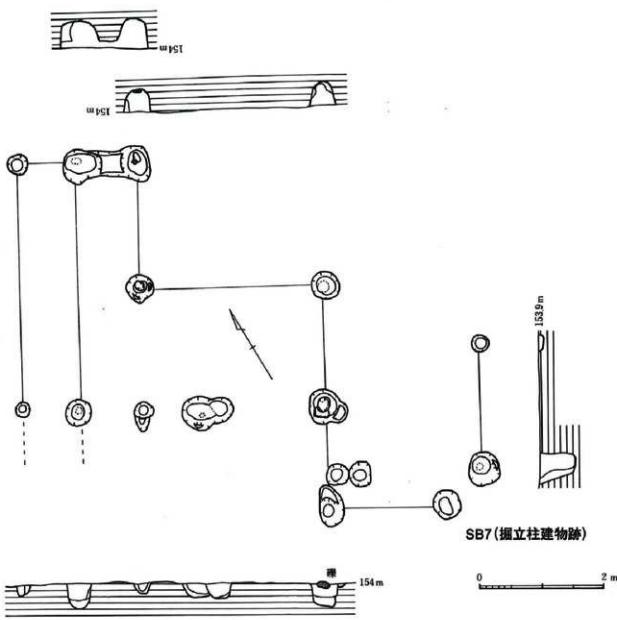


図16 久玉10次A地区 近世の掘立柱建物跡と井戸跡



▲近世建物SB7発掘状況(北から)



▲近世井戸SC32(東から)



▲SC32出土の陶器と染付

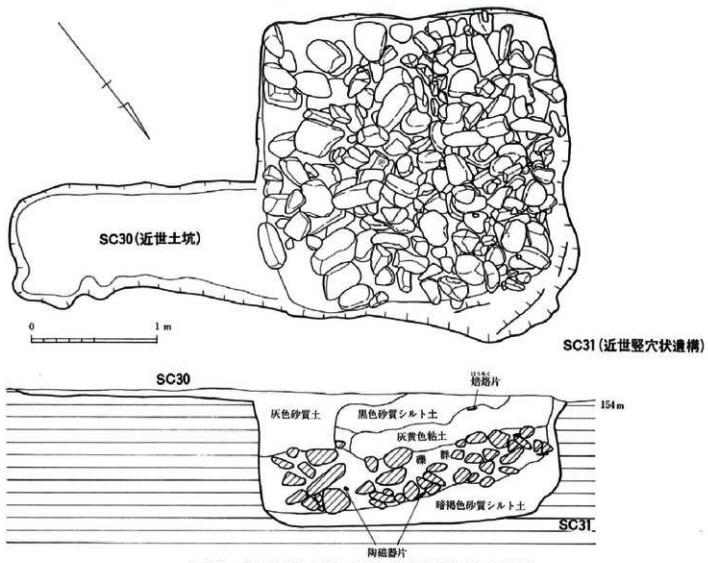


図17 久玉10次A地区の近世土坑と豊穴状遺構



▲近世豊穴 SC31土層断面(南から) 灰黄色粘土層が傾斜している



▲SC31内 焙烙片出土状況(北から)



▲SC31内 磚群検出状況(南から) 北側コーナーから投棄された?



▲SC31完掘状況(北東から)



▲久玉10次 A地区 SC31出土の染付と白磁

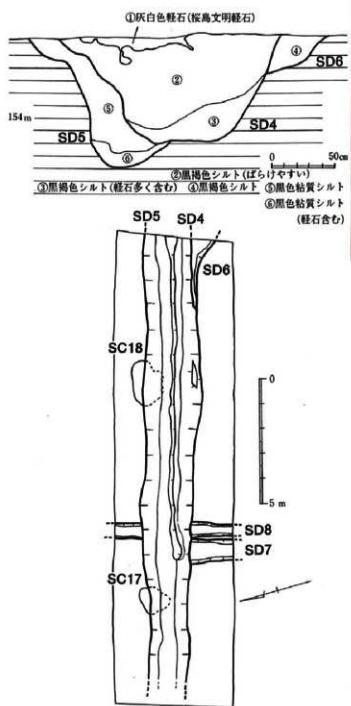


▲ SC31出土陶器

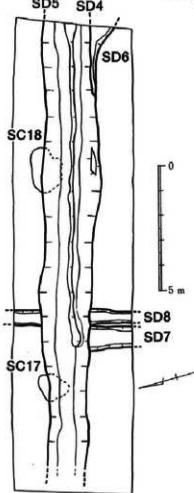


焙烙

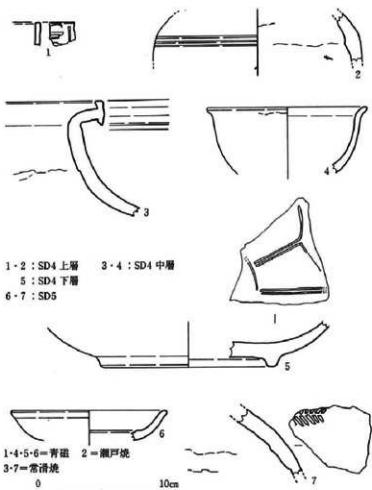
▲ SC31出土の陶器と土師質土器



▲ 中世溝 SD4とSD5とSD6の土層断面(調査区東壁)



▲ B地区 遺構検出状況(東から)



▲ 同上 完掘状況(東から)



▲ SD4・SD5内出土陶器

図18 久玉10次B地区の中世溝と出土陶器

投棄された?)、その中に17世紀末~18世紀前葉の肥前染付の碗・蓋・皿や薩摩焼の碗・壺・すり鉢、土師質の底部糸切り離しの小皿と焰烙など、土器・陶磁器類の破片も含まれていました。

〈B地区〉

第9次調査のB地区で検出された中世の溝状遺構SD1とつながる東西方向に走行する溝状遺構SD4が見つかっています。SD4の最上部には桜島文明軽石の堆積が見られ、その下位の黒色土から常滑焼の壺や青磁の碗・皿などが見つかっています。SD4は同じ方向に走行するSD5を切っており、重なり合なながら、さらに、西へ走行しB地区へと継続します。また、南北方向に走行するSD7・8はいずれもSD4に切られています。

〈C地区〉

調査区域の北側に東西方向に走行するSD9とSD10とSD12があり、後二者は同一遺構の可能性があります。いずれも中世のものです。

4.まとめにかえて

ここでは、第10次調査のA地区をとり上げて、遺構の変遷を追ってみます。

調査区域の東側に密集していた縄文時代中期末から後期はじめの土坑群ですが、その配置に規則性をうかがうことはできませんでした。また、その内部だけなくまわりにおいても当時の人々の日常生活に関係する遺物、すなわち土器や石器などが見つかりませんでした。とりあえず、この土坑群については集落内での活動に直接関係する可能性が薄いとみられることから、ここでは陥し穴状土坑としておきます。

中世、桜島文明軽石の降下(15世紀後半)以前に関しては、側溝と思われる2条の平行する溝状遺構の南側に、ひとまとまりと思われる2棟の建物跡(SB1・2)がセットで存在し、当時の一世帯あたりの建物を含めた村落風景をイメージすることができそうです。

近世~近代にかけての遺構をながめると、まず当時の屋敷割りと思われる溝状遺構のラインが区画整理事業が施工される以前の地割り(昭和50年代の現況地形図)と重なり合っていることに気づきます。例えば、SD1・13・15・17は畑の境界や茶木の植え込みラインと一致しています。この地割りはいつ頃までさかのぼるのでしょうか。SD1から出土した陶磁器類は17世紀前半から19世紀後半にかけてと長期におよぶものでしたが、17世紀前半のものは、唐津焼が3点と全体に対してごくわずかで、多くは18世紀前半から19世紀前半のものでした。また、溝状遺構(SD1・13・15・17)に囲まれた空間に設けられた竪穴遺構(SC31)から出土した陶磁器類は17世紀末から18世紀前葉にしばられるものです。そうやって見てくると、少なくともこの地区では17世紀末以降の溝状遺構(屋敷割り)によって形成された地割りが少しずつ形を変えながら(溝から茶の生垣などへ)、昭和50年代まで引き継がれてきたと言うことができます。ちなみにSD1から少数出土した17世紀前半の唐津焼は、今回の調査区の北方約60mの地点で実施された久玉第2・3・4・5次調査で17世紀初頭の初期伊万里を伴う溝状遺構に囲まれた屋敷跡が見つかっており(矢部1993)、そのあたりからの混入を考えた方がいいかもしれません。

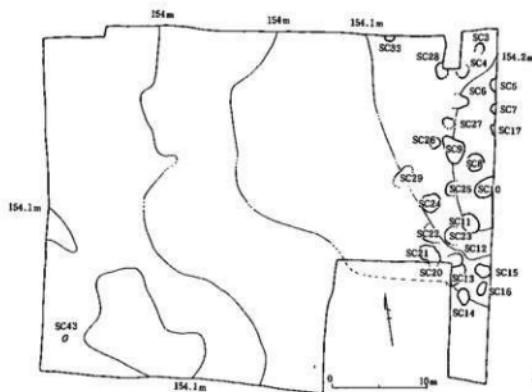
〈引用・参考文献〉

矢部喜多夫 1993 「久玉遺跡第5次発掘調査」

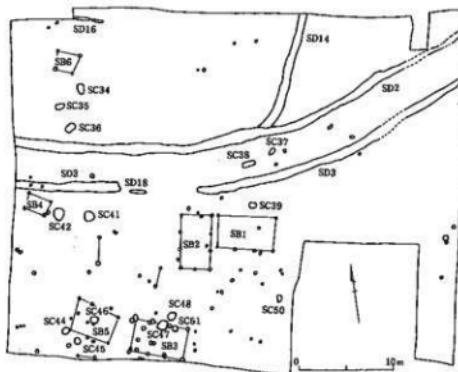
『都城市文化財調査報告書第25集』



▲久玉第10次A地区空中写真(東から)



◆縄文時代の遺構



◀中世の造構



◀近世～近代の邊構

図19 夕玉10次A地区の邊境変遷

報告書抄録

書名	久玉遺跡 第9次・第10次調査					
副書名						
巻次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第46集					
編著者名	桑畑光博・横山哲英					
編集機関	宮崎県都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	1999年3月31日					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
久玉遺跡 (第9次)	宮崎県 都城市	31° 41' 40" 付近	131° 05' 40" 付近	1997年5月7日 1998年2月25日	1430.0	区画整理 事業関連
久玉遺跡 (第10次)	郡元町 字久玉			1998年7月28日 1999年3月29日	1978.5	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
久玉遺跡 (第9次)	集落跡	中世	溝状遺構 掘立柱建物跡 道路状遺構 土坑	青磁 青花 備前焼 土師器		
		近世	溝状遺構 掘立柱建物跡 道路状遺構 井戸 横列 土坑 カマド状遺構 石組遺構	肥前系陶磁器 薩摩焼 瀬戸焼		
久玉遺跡 (第10次)	集落跡	縄文時代	陥し穴状土坑	鐵鏃		
		中世	溝状遺構 掘立柱建物跡 土坑	青磁 常滑焼 肥前系染付 薩摩焼		
		近世	溝状遺構 掘立柱建物跡 土坑 堅穴遺構	土師質土器		

都城市文化財調査報告書第46集
久玉遺跡第9・10次調査

1999年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会
発行 〒885-8555 宮崎県都城市姫城町6 街区21号
TEL (0986)23-9547 FAX (0986)24-1989
印刷 株式会社都城印刷
〒885-0055 宮崎県都城市早鈴町1618番地
TEL (0986)22-4392